高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.68

©Sirkku Sakane

リレー随筆

北欧諸国とフィンランド ―― 坂根シルック

北欧・スカンジナビア・北ヨーロッパ・北欧諸国・北欧地域・ノルディック諸国。ウィキペディアで調べてみると、「北欧は北ヨーロッパのなかで、文化・歴史的な共通点でくくられた地域」「北欧理事会(Nordic Council) 加盟国で北欧諸国とされるのはアイスランド・スウェーデン・デンマーク・ノルウェー・フィンランド」とあります。しかし歴史・文化・社会等に共通点が強く、言語的にも民族的にもゲルマン系民族である他の4カ国に対し、フィンランドだけはウラル系の民族であり、言語も全く異なります。

(例) お母さんを意味する単語：

- アイスランド　modir / mamma
- スウェーデン　mor / moder / mamma
- デンマーク　mor / moder / mamma
- ノルウェー　mor / moder / mamma
- フィンランド　äiti

フィンランドはPISAのランキングが高いことが日本で話題を呼び、制度について学びたいと現地に視察に行く教育関係者が後を絶ちませんでした。また、2014年は日本でも大人気のムーミンの作者トーベ・ヤンソンの生誕100周年やマリメッコのUnikko(ウニッコ)柄が誕生して50年と、20～30年前まではサンタクロースやサウナ以外あまり知られていなかったフィンランドが、今やブームと言えるほど人気となっています。北欧の中でもシャイで物静かなフィンランド人は日本人と気質が似ているとも言われています。

歴史的に昔から深いつながりはあるものの、北欧諸国をひとくくりに説明するのは難しいものがあります。しかし気候や風土は似ており、夏は30℃近くまで気温が上がることもあるのに対し、冬はマイナス30℃になることもあります。また夏は夜も明るい白夜なのに対し、冬は日照時間が究極に短くなり、北部では太陽が2ヶ月も上がらない極夜になります。しかし、家の中で長時間過ごすことを余儀なくされることでデザイン性に富んだ生活用品や建築様式が生まれているのです。また価値観や感性も似ており、ワークライフバランスの取り方や北欧の自然体ライフスタイルは日本で注目を浴びています。消費税が20%を超えるなど、高い税率も有名ですが、その分医療や教育が無償で受けられ、子育て支援や高齢者ケアーが充実していること、男女平等政策が進んでおり官民共に女性が活躍していること、国民の幸福度が高いことが共通しています。また宗教はキリスト教(プロテスタント系のルーテル教会)が最も多いのも特徴です。

似ているようで少し違う北欧諸国。今回の展覧会でそれぞれの国の魅力を発見していただければ幸いです。(東京農工大学特任准教授／文化人タレント／翻訳家・通訳家)

展覧会紹介 Exhibition

北欧文学との出会い展

平成27年
2月21日(土)
▼
4月19日(日)
企画展示室
観覧料500円

北欧は、スカンジナビア半島周辺の北部ヨーロッパ地域にある国々のことです。主にデンマーク王国、スウェーデン王国、ノルウェー王国、フィンランド共和国、アイスランド共和国とフェロー諸島周辺を指しています。極北に近い地域ですので、冬は長く寒冷で大変厳しいですが、夏には白夜があり太陽の沈まない日があります。北欧諸国は近年、高水準の教育、福祉政策で国際的にも注目を集めていますが、さらに、デザイン性に富んだ生活用品や建築様式、豊かで厳しい自然環境の中に順応するライフスタイルなど、北欧諸国の暮らしは理想的な社会として世界的に注目されています。

様々なジャンルの文学作品の背景ともなっている北欧諸国の厳しい風土。その風土に育まれた、豊かな物語の世界を探訪してみましょう。

▲神話の舞台となったアイスランドのキルキュフェル山
写真提供：アイスランド大使館

展示構成

一言で北欧、と言っても、それぞれの国には独特の文化や伝統があります。階段やロビーでは地図と写真を用いて、それぞれの国の名所や縁のある作品をご紹介いたします。また、オーロラのタペストリーやフィンランドの伝統装飾モビールであるヒンメリが会場の周りを彩ります。北欧の風景をお楽しみ下さい。

神話の世界

北欧にはオーディンを信仰主神とする北欧神話と、フィンランドに伝わる民俗叙事詩『カレワラ』があり、どちらも世界や国の起源を描いています。北欧神話はアイスランドの「エッダ」や「サガ」といった文献によって現代に伝わっており、神々や巨人、トロルなどは、ファンタジー作品の題材としても馴染みのある存在となっています。一方、フィンランドの『カレワラ』は19世紀に編纂された民俗叙事詩です。展覧会では伝承や出典、登場する神々の紹介など、幻想的な神話の世界を味わっていただきます。

児童文学の世界

北欧の作家が生み出した物語は、日本で育った私たちも子ども時代に必ず絵本やテレビアニメで触れてきた親しみ深いものです。『ニルスのふしぎな旅』が日本で初めて翻訳された時代のスウェーデン語の原書など珍しい本を展示いたします。また、翻訳されている北欧の絵本を児童文学史とあわせてご紹介いたします。また日本でも著名なアンデルセン、トーベ・ヤンソン、リンドグレーンは特集コーナーでご紹介いたします。

注目！ 北欧ミステリー

近年、北欧ミステリーが世界で注目されています。豊かで平和なイメージの北欧諸国ですが、差別や虐待といった社会問題を題材として取り扱っている作品が多く、主人公がそれらを解決していくことで、理想と現実との乖離（かいり）を浮き彫りにするというスタイルの作品が多くあります。日本でも人気の作品や、ミステリー文学賞など、北欧ミステリーの魅力に触れてみましょう。

北欧の図書館

北欧の図書館は、建築の素晴らしさから、「行ってみたい世界の図書館」として話題になることがあります。図書館内部も現代に

▼コペンハーゲンのアンデルセン像

会覧展紹介 Exhibition

北欧文学との出会い展

平成27年
2月21日(土)
▼
4月19日(日)
企画展示室
観覧料500円

合わせて進化しており、「マルチメディアが装備された公共の居間」として、大学図書館も含め、全ての市民に開かれています。世界的にも図書館を利用し、本を良く読むとされる北欧諸国の人々ですが、彼らの生活の一部として機能し、人生と本をつなぐ場所として認知されている北欧の図書環境をご紹介いたします。

◀北欧最古の歴史を持つウプサラ大学の図書館
Cecilia Larsson Lantz／imagebank.sweden.se

北欧の書斎

読書や思索をするパーソナルスペースである書斎を北欧のインテリアを配してご紹介いたします。空間作りへのこだわりは、そのまま日常で使う全てのものへ反映され、自然の素材や形を生かした北欧デザインは世界的に評価されています。文学の世界でも、畏怖を抱きつつも自然への敬意を忘れず、対話する中で精神の土壌を培ってきました。デンマークの名作チェア「THE EGG」をはじめ、北欧デザインの粋を凝らした家具で、書斎を再現いたします。

北欧文学との出会いから、豊かな読書の世界の扉をひらいてみませんか？

（学芸課／谷岡真衣）

◀機能とデザインを兼ね備えたエッグチェア
写真提供：Denmark Media Center

◆関連企画のご案内◆

■北欧を知る！記念講演会

日本とフィンランドで教育を受け、大学やTVでも活躍中の坂根シルックさんによる講演会。

・日　時：2月22日(日) 午後2時～3時30分（予定）・場　所：高知県立文学館 1階ホール
・演　題：「日本とフィンランドの教育・文化」
・講　師：坂根シルック（東京農工大学特任准教授／文化人タレント／翻訳家・通訳家）
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）・参加費：要当日観覧券

■北欧を聞く！カンテレ演奏会

神話にも登場する北欧の民族楽器”カンテレ”を初めて日本に紹介したはざた雅子さんによる演奏会。

・日　時：3月15日(日) 午後2時～3時30分（予定）
・場　所：高知県立文学館 1階ホール
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）・参加費：要当日観覧券

■北欧を観る！映画上映会「365日のシンプルライフ」

配給：パンドラ（2013年／フィンランド／カラー／80分）
失恋をきっかけに、自分の持ちモノすべてをリセットして行なった青年の365日の“実験”生活。

・日　時：3月7日(土)、3月8日(日) 各日とも①午前10時～　②午後2時～
・場　所：高知県立文学館 1階ホール
・定　員：各回30名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）・参加費：要当日観覧券

■北欧を作る！工作イベント　カラフル・ヒンメリをつくろう！

北欧に伝わる伝統装飾品で、わらに糸を通し、幾何学もようを作ります。美しい影ができることから、別名「光のモビール」と呼ばれています。基本の8面体をカラフルなストローで作ります。

・日　時：3月22日(日)、4月5日(日)　各日とも午後1時30分～3時（予定）
・場　所：高知県立文学館 1階ホール　・参加費：当日観覧券と材料費100円が必要です。
・定　員：各回30名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

他にも北欧のお茶会や朗読の会、木洩れ日コンサートなど多彩な関連企画を用意してお待ちしています。関連企画の詳細はチラシをご覧ください。

■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
（約20分程度）

参加費：要当日観覧券
申　込：不要。
直接会場にお越しください。

平成27年4月1日より、「宮尾文学の世界」の部屋では『天涯の花』をご紹介します。

日本の伝統文化や歴史上の女性たちの生き様やその生涯をテーマに数々の名作を執筆し続けてこられた宮尾登美子さんですが、子どもの頃から身体が弱く、登山の経験はほとんどなかったそうです。それゆえでしょうか。山への憧れは大変強く、今日においても登山関連の刊行物など熱心に愛読されています。

そんな宮尾さんが「一度だけでもすばらしい山の話を自分の手で描きたい」と取り組まれたのが、70歳の時に執筆した『天涯の花』でした。この作品は、高知新聞社をはじめ各地方新聞に180回に渡り連載されました。

物語は、四国の秘境剣山近辺を舞台に繰り広げられ、純粋無垢な少女・珠子が主人公として登場します。同時に、8月下旬から9月初旬にかけ秘境に群生する「キレンゲショウマ」が彼女の象徴として描かれているのが特徴です。

▲秘境剣山に咲く「キレンゲショウマ」

宮尾さんが描いた女性主人公の中で、ベストテンにも入る『天涯の花』の珠子。

珠子は、宮尾さんご自身が紡ぎ出した架空の人物であり、作者は、後の珠子の人生を読者に委ね20歳でその筆を置いています。「きっと、心優しく芯の強い女性珠子は、忍び寄る苦労をものともせず、幸福な人生を送ったであろう」そのような予感が心地よい読後感とともに私たちの心を包み込んでくれます。『天涯の花』の作品としての魅力はここにあるのかもしれません。

ところで、標高1400mに位置する剣神社には、宮尾さんの流麗な筆致で書かれた「月光の花は凛として美しい」の文学碑が建立されており、是非、皆様にもお訪ねいただきたいと思います。

▲剣神社に建立された「天涯の花」文学碑（撮影／平成26年11月）

今回の展示では、『天涯の花』文学散歩地図を作成し、来館者が剣山近郊を散策し『天涯の花』の世界を体験し楽しんでいただけるようにしたいと考えています。また、創作資料や文学碑の模型などを使って作品の魅力に迫りたいと思います。

秘境剣山に咲くキレンゲショウマと清らかな主人公・珠子が繰り広げる文学の世界をお楽しみください。（学芸課長／津田加須子）

※なお平成27年3月下旬までは、「クレオパトラ」をご紹介しています。

平成26年度 第17回児童生徒文学作品朗読コンクール 県審査報告

高知県立文学館では、「第17回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査」を平成26年11月2日（日）13時より、文学館1階ホールにて行いました。今回は、県内の小・中学校から114名が朗読者として参加し、3会場の地区審査（8月15日東部会場、8月18日西部会場、8月21日高知会場）にて選出された19校22名が、11月2日の県審査に出場しました。今年の朗読はレベルが高く、複数回出場している層が多かったことが特徴といえます。特に中学3年生は全員銅賞以上に賞され、継続して取り組んできた成果が花開いたと言えるのではないでしょうか。出場者全員が地区審査よりも上達しており、練習の跡がうかがえました。

今年の特別審査委員には「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」主宰の村岡恵理先生をお迎えしました。『アンのゆりかご～村岡花子の生涯～』で、祖母である村岡花子さんを紹介し、NHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案となったことで話題となりました。審査後の講演会には、立ち見のお客様がいらっしゃるほどでした。講演では『赤毛のアン』をはじめ、子どもと本に寄り添った花子さんのエピソードが紹介されました。その中でも、花子さんは一時期、歌人を目指した時期があり、英語が得意なだけではなく、翻訳家として日本語のセンスを磨いた時期があったからこそ、素晴らしい翻訳ができたのではないかという貴重なお話を拝聴することができました。「言葉への感覚を身につけるため、朗読をすることは、本当に良い取り組みだと思うので、これからも続けてくださいね。」と出場者の皆さんにもエールを送ってくださいました。

観覧者数は、延べ869名と大盛況でした。

今後も、朗読を通して多くの人に文学に興味を持っていただけるよう、ますますコンクールを発展させていきたいです。（学芸課／谷岡真衣）

審査結果は以下のとおりです。（敬称略）

金賞	高知学芸中学校3年	松岡	葵
特別賞 村岡恵理賞	土佐市立蓮池小学校2年	森田	蘭奈
特別賞 教育長賞	高知市立はりまや橋小学校6年	成田	和南
郷土文学賞	高知市立高須小学校5年	田中	友介
銀賞	土佐市立波介小学校4年	細木	宝
	土佐女子中学校3年	藤村	奈乃子
銅賞	黒潮町立佐賀小学校1年	坂本	愛斗
	高知大学教育学部附属小学校4年	松原	璃子
	高知大学教育学部附属小学校5年	堀田	翔太郎
	高知市立愛宕中学校3年	黒原	史織
	土佐市立高岡中学校3年	森岡	真彩

その他、11名の方が入賞されました。

▲県審査に選ばれた皆さん

土佐文学さんぽ 67

舟入川大津周辺 ―ノボリコのくる川―

猪野 睦

▲現在の舟入川

山田堰からはじまる兼山開発の舟入川は香長平野の洪積層、沖積層の段差にそって山田から後免へと弓状に下った。そこから大津へはほぼまっすぐに流れた。かつては筏も流れた川幅の水路だった。この流れも大津あたりへくると急にゆるやかになる。浦戸湾のこみ潮が上ってくる。

この大津あたりを大正時代の舟入川情景として描出したものに高橋幸雄の「幼年」があった。生れ育った少年時代の回想である。

下河という名がでてくるが、川へはフミジといわれる石段があって、そこへゆくとエビやフナが小砂をけりあげて陽光にきらめき、川藻がゆれているとあるから舟入川も清流そのものだった。

晩春の夜、河づらを松明でてらすとノボリコが群になって闇をぬい銀針のようにのぼってくる。決して下流へはむかわない。上方から下流へ金網を移動するだけでいっぱいになる。シラス、うなぎの幼魚である。一村総出の密漁である。いまでは河口でわずかしかとれない高値のシラスも、戦後十年ばかり前までは春先きどこでも見ることができた。

このノボリコは舟入川をさかのぼり、水路から水田へ、さらに山間部の小川、小溝へわけ登っていく。梅雨期の大雨の夜などはミノカサ男らがカーバイトのカンテラをかざし、闇夜の田んぼをまわって鵜箒でウナギを挟みあげ腰籠に入れていく光景もあった。それほどいた。豪雨の夜の移動していくカンテラの灯は遠くから異様に見えた。

雨があがり水がひくと水の流れた山道のちょろちょろ流れをはい上っていく針うなぎもみかけた。それが秋の田溝や水路で大きくなっていてとれた。

下河の上流には巨大な地下水の層があるといわれ、どんな旱ばつ期にも水が枯れなかったと回想にでてくるが、ここもウナギ、ナマズ、フナなどの群がる大きな沼地だった。ここもいま改修がすすみ、その上に高架のバイパスがつき、かなりが埋めたてられ会社の敷地にもなって、かつての沼地原野もわずかに面影をのこしているだけになった。

明見あたりの山がかりでは田植のあとの澄んだ水田を産卵の大ナマズが登っていく。それをとって泥をタライで吐かせていく農家の庭先もみかけた。舟入川からくるのだろう。

「幼年」には水車やせんだん並木などもでてくるが、川とともに消えた光景をよみがえらせてくれる回想名筆ともいうべきか。

（詩人）

資料受贈報告

―寄贈資料から―

『片岡文雄初期詩篇 薄明』

片岡文雄著　混沌社
1971年7月　75頁
B5判　限定50部
澤本惠子氏寄贈

片岡文雄さんは1933(昭和8)年9月、吾川郡伊野町(現・いの町)生まれ。明治大学文学部の夜間に在学中、郷里の先輩である嶋岡晨さんに誘われ、嶋岡さん創刊の詩誌「漠」に参加し、「漠」や「詩学」に詩を投稿、1957(昭和32)年「詩学」2月号では新鋭詩人に推選されますが、大学卒業と同時に帰高。以後は教職のかたわら高知で詩作を続けることとなります。

『薄明』に収められているのは、嶋岡さんによって詩に開眼した20歳から27歳までに発表された17篇。この時代の作品を収めた第1詩集『帰巣』、第2詩集『夜の馬』、第3詩集『眼の叫び』には収録されなかったものから作品を選んでおり、片岡さんはこの『薄明』をこれら3詩集の補遺として位置づけています。『薄明』は3章で構成され、巻末に収められた覚書には各章の解説が書かれており、1章『帰巣』時代の形而上詩から、3章『眼の叫び』以後にみられる、土俗的世界や常民の生死の領域に至る片岡さんの詩作の過程を知ることができます。

1976(昭和51)年、42歳のときには第8詩集『帰郷手帖』(慕蝉堂)で第9回小熊秀雄賞、1998(平成10)年、64歳のときには第17詩集『流れる家』(思潮社)で第16回現代詩人賞を受賞するなど、高知にありながら、中央でも活躍をつづけた詩人であった片岡文雄さんですが、2014年1月、80歳で永眠されました。当館では3月まで企画コーナーにて追悼展を開催中です。ぜひご観覧ください。

（学芸課／岡本美和）

受贈報告（平成26年8月～11月）敬称略

▼**新潮社**・「中脇初枝著「みなそこ」ゲラ」他　▼**多田耕一**　**谷村和子**・「寺田 紳 肖像写真」　▼**榊原忠彦**・「うつそみの人なるわれや 他 論叢―大津皇子の周辺私抄―　榊原忠彦著　共和印刷刊」他　▼**小松弘愛**・「詩と思想・詩人集2014「詩と思想」編集委員会編　土曜美術社出版販売刊」他　▼**竹内 功**・「詩集 生き残り　竹内功著　詩人会議出版刊」　▼**横田晴光**・「探偵小説の父 森下雨村　森下時男著　文源庫刊」他　▼**高知詩の会**・「詩よ 混沌の岸辺に目覚めなさい　高知詩の会合同詩集2014　高知詩の会編刊」　▼**中央公論新社**・「日本ミステリー小説史 黒岩涙香から松本清張へ　堀 啓子著　中央公論新社刊」　▼**安藤厚子**・「こども小砂丘賞作品集39　小砂丘賞委員会編　高知市民図書館刊」　▼**井出幸男**・「柳田国男の学問は変革の思想たりうるか 柳田国男研究7　柳田国男研究会編　梟社刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

常設展虫めがね

シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「反骨の大衆文学」コーナー・浜本浩、「現代の作家」コーナー・上林暁と安岡章太郎、「近現代の詩歌」コーナー・橋田東声を新たに展示しております。

展示作家紹介③　上林　暁

上林暁は、1902(明治35)年、高知県幡多郡田ノ口村(現・黒潮町)生まれ。本名徳広巌城(いわき)。筆名は熊本五高時代に下宿した熊本市上林町に由来。1927(昭和2)年、東京帝大卒業後、改造社に入社。社員時代から同人誌や商業誌に作品を発表、1932(昭和7)年、「薔薇盗人」により新進作家として注目され、1934(昭和9)年に文筆一本の生活に入ります。

その後創作上の行詰まりに苦しみますが、1938(昭和13)年、「安住の家」で私小説の道が開け、妻繁子の発病から死に至る間の日々を直視し描いた「聖ヨハネ病院にて」他の病妻もので文壇に地歩を築きました。

1962(昭和37)年、脳出血に倒れ、右半身不随、発話も不自由となりますが、妹睦子の献身的な手助けを受けながら、左手で、あるいは口述筆記で文芸への執念を貫き、『白い屋形船』で読売文学賞、「ブロンズの首」で川端康成文学賞を受賞するなど、優れた作品を発表し続けました。

今回の展示では、代表的な作品の他、東大時代の恩師ブランデン教授の講義を記したノート、阿佐ヶ谷界隈の文士仲間・井伏鱒二からの書簡、大患後左手で書いた原稿等の資料を紹介しています。

▲展示風景

展示作家紹介④　安岡章太郎

安岡章太郎は1920(大正9)年、高知市生まれ。幼少期、陸軍獣医であった父の転勤に伴い、度々転校。そうした事情もあって学業に親しめず、中学卒業後、数年の浪人生活を送ります。この時既に小説家志望の決意を固めていましたが、慶應義塾大学在学中に召集され、戦地へ。胸部疾患により現役免除となり、東京で終戦を迎えます。

戦後、生活は困窮をきわめ、脊椎カリエスを患いますが、1951(昭和26)年、病床で書きはじめた小説の一篇「ガラスの靴」で文壇デビュー。観念性の強い重厚な戦後の文壇に清新な衝撃を与えました。

1953(昭和28)年、ともに「第三の新人」と呼ばれた吉行淳之介、遠藤周作らに先駆け、「陰気な愉しみ」「悪い仲間」で芥川賞を受賞。学校や軍隊での体験、戦後の旧軍人家庭の苦難といった負の部分を誇張せず、明瞭に認識、客観化し独自の私小説世界を築きました。

2013(平成25)年1月、92歳で逝去。当館では、翌年度の常設展示企画コーナーにて追悼展を開催、終幕後も原稿や書軸といった直筆資料等を精選し、「ガラスの靴」をはじめとする初期の作品、受賞作の数々、高知とのゆかりが深い『海辺の光景』『流離譚』『鏡川』等について紹介しています。

(学芸課／小松路代)

▲展示風景

館長室から

「人生学ぶにしかず」

元吉　喜志男

高知では「○○生涯老人大学」「△△シルバー大学」など、熟年期から自発的な学びの場での活動が活発です。学生自身が運営・経営にあたり、様々なジャンルの講師を招き、メモを取りながら真摯に学んでいる姿勢には頭が下がります。なかには30年以上の歴史を刻み、学生数も各組百数十名を超え、全体では千人近い規模の組織もあります。

当館も講師依頼のお声が掛り、学芸員などがお話しをさせていただく機会も少なくありません。こうした教室に伺うと、向学心旺盛で、年齢を感じさせない若さやエネルギーを感じます。

まさに「人生学ぶにしかず」を実感させられます。

「学問の道は坦々たる平安の大道ではない。ただけわしい山路をよじのぼるのに、疲労困憊(こんぱい)をいとわない者だけが、輝かしい絶頂を極める希望をもつ」とは有名な経済学者の言葉です。幾つになっても自身を磨こうという精神は尊いと思います。

江戸時代の詩人で鍋島藩の草場佩川という人の詩に、次のような漢詩があります。

山行示同志　　山行同志に示す

路入羊腸滑石苔　路　羊腸に入りて石苔なめらかなり
風従鞋底掃雲廻　風　鞋底より雲を掃ってめぐる
登山恰似書生業　登山は　あたかも書生の業に似たり
一歩歩高光景開　一歩　歩高くして　光景開く

【意訳】だんだんと登ってここまでくると、道も細い、ゴロゴロの石が苔むして、ヘタをするとすべりそうだ。風がさっと靴の裏から吹き上げてきたと思ったら、頭の上から雲を散らしちゃったよ。登山と勉強はよく似ているね。一段一段高くなるほど目さきがひろくなるからな。(大内兵衛先生の『まなぶ』での訳を引用)

「人が真っ先に衰弱し始めるのは、専門以外に対する好奇心であるようだ。」ということを以前物の本で読んだ記憶がありますが、まさに留意すべき至言のように思われます。

万葉集・こころの旅展

大和路を愛した入江泰吉の作品とともに

2月8日(日)まで好評開催中！

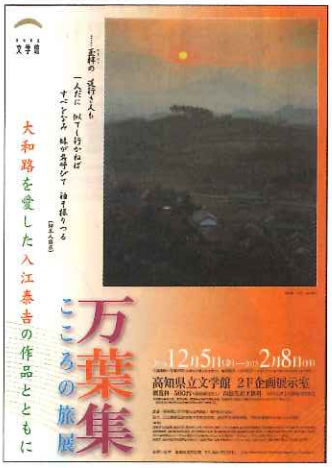
文学館では現在、現存する最古の歌集『万葉集』の世界により親しんでいただこうと、「万葉集・こころの旅展～大和路を愛した入江泰吉の作品とともに～」を開催しています。

この企画展は、もともと視聴覚を通した万葉集の普及事業の一環として、入江泰吉記念奈良市写真美術館で開催された「よみがえる万葉のこころ」展をベースに、さらに作品を厳選してご紹介する企画展です。

▲ロビーの様子

入江泰吉は、昭和初期を中心に写真家として活動し、故郷・奈良を拠点に風物や仏像などの写真を撮り続けました。ロビーコーナーでは、入江泰吉と入江泰吉記念奈良市写真美術館、そして、『万葉集』についてご紹介しています。愛用のカメラや著書をはじめ、覚書帳や余技作品「ガラス絵」「木っ端仏」などをご覧いただけます。あわせて、『万葉集』のコーナーでは、万葉集の概要や関係略年表、万葉の舞台となった地を一望いただける地図、さらに、歌びとのコーナーも設けていますので、ぜひご覧ください。

企画展示室では、万葉集の時代に造営された四つの宮ごとに、万葉集の歌、現代語訳・解説を紹介しています。「明日香宮」では、入江泰吉が〝一瞬を撮る〟ことにこだわり生まれた、「二上山落日」など。「藤原京」では、柿本人麻呂が愛妻の死に際し、血の涙を流して詠んだ歌を紹介した「山田道」など。710年に遷都された「平城京」では、「あをによし　ならの都は…」にちなんだ「陽春大仏殿」と、世の無常を歌った歌に関連した「たそがれ平城京跡」など。そして「吉野離宮」では、〝水の吉野〟、吉野の川の美しさを歌った「吉野川宮滝　夢のわだ」など…。歌は素朴で、誰にでも共通して存在する、喜怒哀楽の心が詠まれています。その情景を彷彿させるのが、入江泰吉の写真。心に描いた情景をみごとに写真の画面に再現した作品は、私たちの心を万葉の地へと誘ってくれます。121cm×95.5cmという迫力の写真は、お客様から「見応えのある作品だ」とのお声をいただいています。



また、室内には、「四季の植物さんぽ」のコーナーも併設しています。入江は、山野の草むらの陰にひっそりと咲く野草や花を見つけた時、万葉びとの歌ごころに触れる懐かしさをしみじみと味わったそうです。展示では、寒中に咲く花の姿が万葉びとに愛され、多く歌に詠まれた「うめ」(白梅)「萩」など、11種の植物を万葉歌とともにご紹介しています。

詠むたびごとに、私たちの胸に迫り、忘れていた「何か」を思い出させてくれる、万葉集の歌の数々をぜひ、万葉集の気配・余情を今によみがえらせようと心を注いだ、入江泰吉の作品とともに味わってみてください。

(学芸課／野々村昭美)

▲展示の様子

万葉集・こころの旅展

会期中無休　観覧料 500円

記念講演会開催！

「入江泰吉と万葉集」

※要申し込み

大阪府立大学教授・村田右富実氏による記念講演会です。

- 日時：平成27年1月31日(土)
  午後2時～3時30分
- 場所：高知県立文学館　1階ホール
- 参加費：要当日観覧券
- 申込：電話または文学館受付にて
  事前申し込み。(定員100名)

高知県立文学館ニュース 第68号 平成27年1月10日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー 1月～3月

企画展案内

万葉集・こころの旅展 ～大和路を愛した入江泰吉の作品とともに～

平成27年2月8日(日) まで　会期中無休

場所:企画展示室　観覧料:500円

陽春大仏殿

わが国最古の『万葉集』の歌には、いにしえの人々の喜怒哀楽のさまがまっすぐに表現され、私たちの心に根付く日本の原風景を呼び起こしてくれます。大和路特有の美や情趣をライフワークとして撮り続けた入江泰吉氏の写真を通して、大和路に漂う余情や空気感に思いを馳せていただきます。

関連企画 申込受付中

■記念講演会「入江泰吉と万葉集」

大阪府立大学教授・村田右富実氏による記念講演会です。

・日　時：平成27年1月31日(土) 午後2時～3時30分
・場　所：高知県立文学館　1階ホール　　・参加費：要当日観覧券
・申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

万葉集・こころの旅展のご案内をしています！詳細は7ページをご覧ください。

北欧文学との出会い展

平成27年 2月21日(土)～4月19日(日)　会期中無休

場所:企画展示室　観覧料:500円

ラップランドの夜空に広がるオーロラ
写真提供：フィンランド政府観光局

サンタやトロルなど独特の伝承や神話。人魚姫、ムーミン、ピッピなど日本になじみ深い児童文学。社会問題を描き出す北欧ミステリー。これら豊かな本との関わりを支える図書館。世界の注目を集める北欧の暮らしから「本当の豊かさとは何か」を考えてみませんか？ 自然と共に生活をしてきた北欧の暮らしと文学についてご紹介します。

関連企画 申込受付中

■北欧を知る！記念講演会「日本とフィンランドの教育・文化」

日本とフィンランドで教育を受け、大学やTVでも活躍中の坂根シルックさんによる講演会。

・日　時：2月22日(日) 午後2時～3時30分(予定)
・場　所：高知県立文学館　1階ホール　　・参加費：要当日観覧券
・申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

※高知県立文学館マスコットキャラクター**しおりちゃん＆筆太**の**オリジナルクリアファイル(税込250円)**ミュージアムショップにて好評販売中！**オリジナル缶バッジ**も開発中です♪

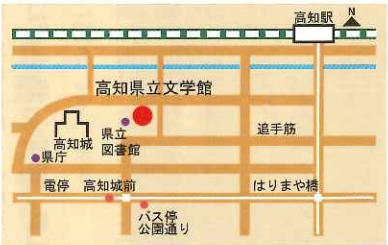
その他、展覧会の図録や各種グッズもございますので、ご来館の際は、1階ミュージアムショップにもぜひお立ち寄りください。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「公園通り」下車　北へ徒歩5分
●JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857